



Tanglewood tales覚え書 : ホーソンの児童文学の 帰着点

著者	松山 信直
雑誌名	主流
ページ	114-133
発行年	1982-03-14
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015311

Tanglewood Tales 覚え書

——ホーソンの児童文学の帰着点——

松 山 信 直

ホーソンの著作の中で、無視されたり、軽視されたりしてきた作品は少なくない。第一に指摘できるのは、おそらく、ボーディン大学の学友だった Pierce の大統領選挙戦のために書いた *The Life of Franklin Pierce* (1852) であろう。だがこの作品は文学的創作ではなく、他の著作と同列に並べられる性格のものではない。文学的業績として軽く見られてきたのも無理はない。ところが、文学的業績でありながら、批評家や研究家に無視、軽視されてきたのが、少年少女向きに書いた作品である。ここにとりあげた *Tanglewood Tales* (1853) は、ホーソンのいわゆる児童文学の最後の作品である。

I

ホーソンは大人向きの作品を書きながら、かなり早い時期から、児童文学にも深い興味を示していた。1835年には、*Youth's Keepsake* という少年少女向きの贈答用年刊誌に“Little Annie's Ramble”（1837年の *Twice-Told Tales* に収録）を發表しているし、1836年には、*The Token* 誌の発行者 Samuel G. Goodrich の依頼で、*Peter Parley's Universal History*（1837年出版）を執筆・編集している。1838年3月上旬には、ホーソンのことを「若い人たちのために新しい文学を創造しようとする一大精神的企てをずっと考えていた」人として紹介する人もあった。¹ 同じ月の下旬に、ホーソンは、ボーディン大学の同級生で、すでに詩人として

名声を得ていた H. W. ロングフェローに宛てて、話題にしていた「あのおとぎ話の本 (that book of fairy tales)」² について、もっと話し合いたかったと手紙を書き、二人が協力すれば、「われわれは大ヒットを生み、少年少女文学の全体系を全面的に改革する (revolutionize the whole system of juvenile literature) ことができるかもしれません」³ と述べている。

ホーソンが少年少女向きの作品を考えた時、大人向きの文学では充分収入が得られないという経済事情があったことは事実である。けれども、彼の児童文学に対する深い興味は、ロングフェローの協力が結局得られなくても、以下に掲げるように、何種類かの子供向きの作品を単独で発表するという成果を生むことになった。

1. アメリカの歴史に取材したシリーズもの

a. *Grandfather's Chair: A History for Youth* (1840)

b. *Famous Old People: Being The Second Epoch of Grandfather's Chair* (1841)

c. *Liberty Tree: With The Last Words of Grandfather's Chair* (1841)

(全体を以下 GC と略す)

2. 歴史的有名人の伝記上のエピソード集

Biographical Stories for Children (1842) (以下 BSC と略す)

3. 短篇の創作もの (先に掲げた “Little Annie's Ramble” 以外のもの)

a. “Little Daffydowndilly,” *Boy's and Girl's Magazine*, Aug., 1843

b. “A Good Man's Miracle,” *The Child's Friend*, Feb., 1844

(ただし、大人向きの雑誌等に掲げられたが、子供向きとしても読める作品、たとえば、“The Snow-Image: A Childish Miracle”

(*International Miscellany*, Nov., 1850) などもあるが、ここでは除外した)

4. 古典神話物語

a. *A Wonder Book for Girls and Boys* (1851)⁴ (以下 *WS* と略す)

b. *Tanglewood Tales for Girls and Boys : Being A Second Wonder-Book* (1853) (以下 *TT* と略す)

上に言及した1838年3月のロングフェロー宛の手紙で言っている、少年少女文学の全体系を全面的に改革できるかもしれないと考えた「おとぎ話」というのは、一覧表の1, 2, 3のような作品ではなくて、実は4の古典神話に取材した作品であった。*American Notebooks* 中の1838年のメモの一つに、“Pandora’s Box — for a child story” というのがすでに見られるし、⁵ ロングフェローとの間で話題になった「おとぎ話」の本は、ホーソンの側では、1838年10月には、“Boy’s Wonder-Horn” という表題がすでに与えられていた。⁶ ロングフェローの協力が得られそうにないと知って、ホーソンはこの本の計画を一時あきらめたようであったが、その後いくつかの段階をへて、この本は、1851年11月8日、*A Wonder Book* として出版された。Pandora の箱も“The Paradise of Children” として収まっている。この作品の序文の冒頭で、「著者は以前から、古典神話の多くは、子供たちのためにとてもすばらしい読物に書きかえることができるという意見を持っていた」⁷ とホーソンは書いているが、上に見た通り、この作品は13年以上も暖めていた作品であって、序文の言葉は嘘ではなかった。

II

さて、上に引いた *WB* の序文の冒頭に見えている、子供向きの読物への書きかえ、ということについて、ホーソンは *WB* と *TT* の二つの神話

物語の中で、必要以上と思われるほど、弁明している。

ホーソンの主旨を要約してみると、ギリシャ神話は、二千年三千年の古さのために、神聖視されるようになった形態を持ってはいるが、これを空想のおもむくままに、新しい形に変えたとしても冒瀆の罪を犯したとは思われない。というのは、ギリシャ神話は古昔から存在していたのであって、創造されたというものではないし、また、人間が生きている限り、滅ぶこともない。この不滅ということがあるからこそ、時代によって、その時代固有の風俗や感情の衣を着せても構わないではないか、ということになる。⁸

この古昔からの存在と不滅の二点に加えて、ホーソンはギリシャ神話が世界の共有財産、あらゆる時代の共有財産であることを強調する。そして、古代の詩人達はこの神話を好きなように作りかえたのではないか、どうして私が書きかえて悪かろう、とも言っている。⁹

この新しい形に変えるとか、書きかえることには、今の場合「子供達のために」という目的がある。ホーソンは *BSC* の序文で、子供達を「神聖なもの」と見なしていると言い、「若い心の泉の中に、その水を苦し、汚すようなものは、絶対に投げこみたくない」¹⁰ と述べている。汚れや穢れのない子供は、さらに、悪や悲しみや不幸とも本来無縁であるべきであろう。ギリシャの伝説的黄金時代にひっかけて、ホーソンが *TT* の語り手に、「子供達というものは、この幸福な黄金時代の男女をあらゆる唯一のものである」¹¹ と言わせたのも当然のことであろう。

ところが、このような子供達に語って聞かせるギリシャ神話は、不滅の美しさを持ってはいるが、冷酷・無情であったため、後の時代すべてに「計り知れないほどの害毒」¹² を与えた、と *WB* の語り手は言っている。また、*TT* の序文で、ホーソンは次のようにも書いている。

これらの昔の伝説には、キリスト教化された我々の道徳観にとって、最も忌み嫌うものがたくさんある。たいへんぞっとするものもあるし、ひ

どく憂うつで悲惨なものもある。こういう忌み嫌うもののうちにギリシヤの悲劇作家たちは自分達のテーマを求め、そのテーマを、これまで世界で見たこともないような厳しさ極まる悲しみの型にはめこんだのだ。¹³

当然のことながら、ここで「子供達のために」新しい形に変えるという必要が生じてくる。ところが、*TT* の序章で語り手は、「物語の一つを語り始めると、いつでも、いとも簡単に、その物語が聞き手の子供らしい清らかさにあてはまるようになってしまった」と述べている。彼に言わせると、この神話にある「反対すべき性格は、もとの寓話には本質的なかわりがなく、寄生して生じてきたもの (parasitical growth)」のようだというのである。そして、自分をとり囲んで、じっと眼を開いて見つめている無邪気な幼な子供達と共に感じるように、自分の想像力を働かせると、「このような反対すべき性格はなくなってしまい、もう考えられないものになってしまった」¹⁴ と述べている。

ホーソンは子供の感受性の鋭敏さを非常に高く評価していた。このことは、*The Scarlet Letter* の Pearl が、Hester や Dimmesdale にどのように鋭く反応したかを想起すだけでも、充分理解できるが、ホーソンは *WB* の序文の結びで、「子供達は、想像の上でも、感情の上でもどんなに深いものに対しても、高いものに対しても、それが同時に単純でさえあれば、計り知れない感受性をそなえている。彼等をまどわすのは、手のこんだもの、複雑なものだけである」¹⁵ と書いている。

従って、子供達のために書きかえる、ということは、錯綜したことを避けながらも、子供の計り知れない感受性に訴えるように、自分の想像力を充分に働かせることを意味するのである。しかも、ホーソンはこのことを、「子供時代の水準にまで、知性と空想力を高める (raise) 必要がある」¹⁶ というのである。別の言い方をすれば、もとの神話に対して、知性と空想力を駆使して、かなり自由な扱い方をする (a great freedom of

treatment [WB],¹⁷ free way of handling [TT]¹⁸) 必要があるということになる。

ところが、WB と TT には典拠とした書物があった。WB の語り手が最初の物語を語る直前に、「(彼は) アンソン教授のおかげを大いに受けながらも、想像力が大胆奔放に命じるままに、すべての古典の権威を無視してしまった」¹⁹ と書かれている。このアンソン教授というのは、コロンビア大学のギリシャ語・ギリシャ文学教授の Charles Anthon のことで、彼の *A Classical Dictionary* (1842) がホーソンの資料となったと、1969年に Hugo McPhersonが指摘した。²⁰ ホーソンはこの辞書の記述に大いに依りながらも、WB の語り手について言われているように、想像力の命ずるまま、必要に応じて古典の権威を無視し、子供向きに神話物語を書いた。ところが、WB と TT の間には、いくつかの大きな違いが生まれることになったのである。

III

ホーソンの子供向きの作品は、単独で発表した二、三の短篇を除けば、語り手が物語をシリーズ風に連ねて語っていく形式がとられている。しかし、物語そのものには、語り手と聞き手の間の会話のやりとりや、物語をする場所や状況の説明を与える外枠がついている。

たとえば GC では、古い眩掛椅子に座ったおじいさんが、この椅子にかかわったアメリカの歴史上の人物や出来事を、12才の Laurence をはじめとする四名の子供達に語ることになっている。作品の冒頭で、まずおじいさんがこの椅子をアメリカの植民地に持ちこんだピューリタン移民の説明をし、椅子は Johnson という人と結婚した Arbella が持ってきたものだと言ふ。そして、聞き手の子供達と会話のやりとりが紹介される。このようにいわゆる omniscient な枠があってから、おじいさんの “The Lady Arbella” の物語がはじまり、物語が終ると、再びおじいさんと子

供達の間のやりとりを描く枠があって、最初の部分が終る。以下同じように、物語は枠にかこまれて、シリーズ風に次々と連なっていく。

このパターンは、*BSC* でも *WB* でも守られていた。²¹ *WB* では、マサチューセッツ州のバークシャー地方の Tanglewood 邸に集まった12名ばかりの子供に、Eustace Bright という18才のウィリアムズ大学の学生が神話物語を聞かせる、という形式をとって、Bright と聞き手の Primrose や Periwinkle 等の名で呼ばれる子供達や、古典学者 Pringle 氏などとの会話のやりとりが枠となっている。特に *WB* では、Bright が物語をする Tanglewood 邸やこの地方の情景がふんだんに織りこまれている。

これ等の語り手は、言うまでもなくホーソンの代弁者ではあるけれども、omniscient な視点で語られる枠の存在のために、作者とは別個の人物だということが強調されている。ところが、*TT* にはこの外枠がない。他の作品では外枠の他に序文がついているが、*TT* ではこの序文もなく、その代り、*The Scarlet Letter* の “The Custom House” や、*Mosses from An Old Manse* の序章 “The Old Manse” に相当する “The Wayside” という Introductory が付いている。

TT のこの序章で、ホーソンはコンコードに購入して住んでいた Wayside 邸のことを若干語り、この家に Bright 青年が訪れてきて、*WB* 出版後 Tanglewood 邸の子供達に語ってやった話を書いて持ってきた、としている。もちろん Bright は架空の人物だが、*TT* は彼が物語をした場所の名をとって表題としたもので、*WB* と同じく、神話物語の語り手は Bright となっている。

しかし、ホーソンの児童文学の特色となっていた枠が *PT* で無くなったことは注目し得る。枠がなくなった理由について、R. H. Pearce は二つをあげているが、いずれも納得し難い。²² ホーソンは、*WB* の枠に、先に一言触れたように、バークシャー地方について記した Notebooks

の記録を大巾にとりこんだ。ホーソンはこの資料を使い果たすと Pearce は言うのだが、まだ使われていない資料は残っているし、²³ *TT* の執筆の時期とパークシャーに住んだ時期はそう遠くへだたっているのではなく、記憶が無くなったというのでもあるまい。Pearce があげる第二点は、Robert Carter という人が杵の不適切さをかなり詳しく指摘してきたからかもしれない、ということだが、Carter の手紙は1853年2月10日付となっていて、²⁴ *TT* の執筆は3月9日に終わっていることからみると、²⁵ Carter の批判を得たので杵をはずしたと考えるのは、少々無理のように思える。

杵が無くなった問題は、その理由より、もう少し広い視野から眺めてみる必要がある。*WB* はいわゆるホーソンの最も充実した創作活動がなされた1849年から1853年の時期に、*The House of the Seven Gables* (以下 *HSG* と略す) に次いで書かれた作品で、その脱稿 (1851年7月中頃) 後、ホーソンは第三の短篇集 *Snow Image and Other Twice-Told Tales* (*SI* と略す) を編集して出版 (1851年12月) し、さらに *The Blithedale Romance* (*BR* と略す) を執筆 (1852年5月脱稿) して出版 (7月中旬) し、*Life of Franklin Pierce* を執筆 (8月末脱稿) して出版 (9月上旬) した。この *Life* を書いた学友 Pierce が大統領に選ばれたあと (11月)、*TT* が執筆 (序文は1853年3月13日付) されたのである。²⁶ *Snow Image* はこの期に書かれたのではないので、今これを除外してみると、二つの神話物語の間には、一見全く共通点のない異質的な作品が介在していることになる。ところが、この共通点がない、異質的だという作品は、物語の視点ということで、二つの神話物語にかかわってくるのである。*HSG* から *TT* までを通して眺めてみると、ホーソンはまるで物語の視点を、一作ごとに実験し、視点の違いがもたらす効果の一つ一つためしてみるかのようになり、五つの作品をそれぞれ異なった視点で語っているのである。それを簡単にまとめてみると次のようになる。

HSG は序文で作者を三人称で扱い、物語は、作者の一人称で語り始められ（「私は今述べたその町を時折訪れる際には、必ずといってよいほどピンチオン通りへ曲ってみるのである。」）、やがてすぐ、Editorial “we” が採用される（「我々は今からさほどへだたっていない時代から我々の物語の本筋を始めることにしよう。」）²⁷。

WB では、すでに触れたように、神話物語の本体は **Bright** が語り手となり、子供達が登場する枠は omniscient な視点で描かれている。

BR では、作中人物の一人 Coverdale を視点的人物として、彼の一人称の語りで物語が進行する。語り手の Coverdale、あるいは、彼の語りについて、これまで様々な論議が展開してきたことはさて置くとして、ブルック・ファームをモデルにした Blithedale や風景を描き出す Coverdale は、**WB** の神話物語を語る **Bright** と全く同じく、作者ホーソンの代弁者の機能を果しているといえる。ところが、語られる神話物語の外に **Bright** が位置しているのに反して、Coverdale は Blithedale に集まった数名の人々にかなりかかわり合いの深い作中人物であって、中年になった時点で、Blithedale に参加した若い頃の経験を、今眼の前で起っているかのように語るのである。従って、語り手 Coverdale は、ホーソンの代弁者である視点と同時に、出来事に近い観察者の視点と回想者の視点を持っていることになる。

これに対して、選挙用の伝記である Pierce の *Life* では、ホーソンは事実に則した客観的視点に極めて忠実であろうとする。そのためホーソンは、Pierce についてなされた評言や Pierce 自身の日記・演説等を²⁸ かなり長々と引用したりする一方で、Pierce の “Sentiments” として描いたものは「眼の前にある事実から著者〔ホーソン〕が臆測したものであって、著者がその人となりを描いている人物〔ピアス〕の考えるところと合致するかもしれないし、合致しないかもしれない」と断わって²⁹ いる。つまりホーソンは、真実を語る伝記作家として、可能な限り客観的で正確

な視点で Pierce の Life を書こうとしたのである。

ホーソンはこのように異なった視点の試みを重ねたあとで、再び神話物語に戻って *TT* を執筆した訳だが、*HSG* の Editorial “We” や、*BR* の作中人物の一人の一人称の視点、*Life* の客観的視点とは違って、再び代弁者の Bright を使い、Bright の一人称の語りをとりながらも、先に述べたように、枠を付けなかった。

すでに触れたように、*TT* では Introductory の “The Wayside” で、Bright が子供達に語った話を書きとめてホーソンに見せに来たことになっている。従って、たとえば作中で “I cannot stop to tell you hardly any of the adventures that befel Theseus, on the road to Athens.”³⁰ と語る私とは Bright であり、語りかけている you とは、聞き手の Primrose 達である。

TT の六つの物語には、このような語り手が直接聞き手に話しかける表現が沢山挿入されている。*WB* でも同様の表現が若干あるが、*WB* では六つの物語の前後に、語り手と聞き手の間の会話のやりとりが行われる枠が常にあるため、I—you の関係は、物語ごとに Bright—Primrose 達だという確認がなされることになっている。ところが、この枠のない *TT* では、たしかに Introductory で、I=Bright, you=Primrose 達、という約束が確立されているが、物語が進行するにつれて、読者の側ではその意識がうすれてゆき、逆に I=Hawthorne, you=読者という印象が非常に強くなってくるのである。子供向けの物語の語り手は、*GC* のおじいさんにしても、*BSC* の Temple 氏も、*WB* の Bright と同じく、ホーソンの代弁者ではあるが、形の上では、枠となる物語があるために、第三者としてはっきりホーソンと区別されていた。ところが、枠のなくなった *TT* では、Bright は語り手としての存在が薄れ、ホーソンが直接「私」として語りかけているのではないけれども、それに非常に近い効果を生じているのである。

別の見方をすれば、ホーソンは、*TT* において、機能的な語り手を一応設定しておきながらも、自分のより生の声で語りたかったために外枠を外した、と言えるのである。これを逆に言えば、ホーソンはそれほど、*TT* の物語を子供達に語ることに興味を持っていたということになる。ホーソンの出版者でもあり、批評家でもあった James T. Fields の次の言葉は、このような、*TT* に対するホーソンののめりこむ態度を側面から伝えるものである。

「タングルウッド物語」の執筆は、彼（ホーソン）にとって楽しい仕事となった。そして彼がこの物語を書いていた間に出した手紙は、すべて、彼の浮き浮きした気分を証拠だてるものにあふれている。³¹

当然のことながら、ホーソンは一体何を自分のより生の声で幼い読者に語りかけたかったのかが、問題となってくる。そしてこの問題は、先に言及した子供達のための書きかえとも重なってくるのである。

IV

TT には、次に掲げる六つの物語が収めてある。

1. The Minotaur
2. The Pygmies
3. The Dragon's Teeth
4. Circe's Palace
5. The Pomegranate-Seeds
6. The Golden Fleece

このように物語を並べてみると、ここには *WB* の “The Golden Touch” や “The Miraculous Pitcher” のような、黄金を欲した Midas 王や旅人に親切だった Philemon と Bocis などに起った奇蹟の出来事を語って、あからさまな教訓を説くような物語はない。また、“Gorgon's Head” や “The Three Golden Apples” のように、有名ではあるけれ

ども、巧みな手段で目的を達成するだけの冒険物語もない。TT を構成する六つの物語には、WB の物語と違って、少なくとも二つの顕著な特色がある。

その一つは、TT の物語は、中心人物が、英雄であろうと、王であろうと、神であろうと、支配者・司政者・指導者として、部下や国民や支配するものの命運のかかった立場に、どこかでかかわってくる物語ばかりである。その典型的な例は、冒頭の物語“The Minotaur”の主人公 Theseus に関して見ることができる。³²

この物語は、アテーナイの Aegeus 王とトロイゼーンの王 Pittheus の娘 Aethra の間に生まれた Theseus を主人公とし、Aegeus 王が岩の下においておいた刀とサンダルを、Theseus が成長してとり出し、父に会うためアテーナイに旅立つまでの第一部と、アテーナイに来た Theseus と Aegeus 王との再会の部分と、Theseus がクレータ島に行つて、アテーナイの七人の青年と七人の娘をいけにえとして餌食にする怪物 Minotaur を倒す部分との三つに分けて考えることができる。

幼い頃の Theseus はなぜ父 Aegeus 王が自分達といっしょに住まないのか、と母によくたずねた。すると母は、「国王には面倒をみななければならない国民というものが居るのよ。王様が治めている男や女の人、彼にとって子供たちにも相当するものなのよ。ですから、他の親たちのように、自分の子供を可愛がる暇がとれないのです。あなたのお父様は、自分の小さい子供に会うためにさえ、国を離れることが全然できないのよ」³³ と言って、国王の立場を説明する。

また、Theseus は Aegeus 王にアテーナイで会ったあと、クレータ島に住む怪物 Minotaur のいけにえとして送られる人々の一人として加わることを申し出る。Aegeus 王の反対に対して、Theseus は、「私は王子で、貴方の息子で、貴方の王国の正当の跡継ぎであるからこそ、貴方の家臣の災難を惜しみなくわが身にかぶるのです。」と言い、さらに「お

父上、貴方は国民の上に立つ王であり、彼らの幸福に対して大いに責任があるのですから、一番貧しい市民たちの息子や娘たちがひどい目に会っても、貴方にとって一番大切なものを犠牲にしなければいけません」³⁴と答える。

ギリシャ神話には、神々や王や巨人や英雄など、武勇に長じて権力を持ち、支配力を誇るものは多い。ホーソンはそのような権力者・責任者のあり方や義務を強調するのである。もちろんこれは典拠とした Anthon の資料にはないことで、ホーソンが書き加えたことである。Theseus のほかに、Antaeus の仇を討とうと、檄をとばして Hercules に立向おうとする Pygmy の一戦士や (“The Pygmies”) 都市を造らせる Cadmus や (“The Dragon’s Teeth”), Ulysses の指揮者ぶり (“Circe’s Palace”), 王位をとりもどそうとする Jason (“The Golden Fleece”) などに、このモチーフはあらわれている。王位をとりもどそうと旅立った Jason は、増水した川岸で老婆に会い、川を渡してくれとたのまれる。Jason がしぶっていると、老婆は「困っている老婆を助けなければ、お前は王になるべきではないよ。王がいるというのは、弱い者、困っている人々を救うためなのだよ」³⁵と Jason に言う。

このような指導者・王の立場の強調は、TT 執筆直前に学友 Pierce が大統領に選ばれたことと、間接的ではあるが、深いかわりあいがあるように思える。選挙戦用にホーソンが書いた *Life* で、ホーソンは Pierce が大統領にふさわしい指導力の持主であるばかりでなく、勇気にあふれ、責任感の強い、かつ、部下思いの人間であることも強調した。

ピアス准将は、機会がめぐまれる度に、高度の指導力という特性を顕著に示したばかりでなく、銃火に体をさらす点で、がむしゃらな勇気とも呼ばなければならないものも見せた。

さらに、・・・彼の心の優しさ、彼の同情、部下に対する兄のような、また父のような思いやりは、数十回となく示され、彼の指揮下にあった

すべての人々の熱烈な愛情を受けることとなった。³⁶

このような Pierce に求めたアメリカの指導者としての理想像が、*TT* の王や英雄や指導者の姿にかぶさってきたと言えば言い過ぎであろうか。ホーソンは Pierce が大統領候補に指名された時、それを名誉・出世・成功として受けとったのではなかった。Arlin Turner が、信憑性はないが真実のひびきがすると言って紹介しているところでは、ホーソンは Pierce に向かって、“*What a pity!*”あるいは“*I pity you.*”とも言ったそうである。³⁷ これは責任の重大さ、求められる犠牲の大きさを充分承知した上での発言と受けとることができるが、すでに見た Theseus の姿に、そのような責任感・犠牲の意識が描きこまれていることは注目してよい。

TT のもう一つの特色は、暖い人間的情愛の強調ということである。ホーソンは神であろうと、王や英雄であろうと、巨人や小人であろうと、彼等の人間的情愛を強調して資料にない補足を行い、また必要に応じて資料が伝えることを書き変えている。

再び Theseus を例にとると、“*The Minotaur*”の第一部に当たる部分
は、Anthon の資料では次のように、数行で記述されている。

THESEUS... king of Athens, and son of Aegeus by Aethra, the daughter of Pittheus, monarch of Troezen, was one of the most celebrated heroes of antiquity. He was reared in the palace of his grandfather; and, when grown to the proper age, his mother led him to the rock under which his father had deposited his sword and sandals, and he removed it with ease and took them out. He was now to proceed to Athens....³⁸

ホーソンはこの数行を、約五頁の物語に組み立てた。今その物語を詳しく説く余裕はないけれども、ホーソンの潤色が強調したのは次のようなことである。

1. Theseus のまだ見ぬ父をしたう気持
2. 父のいるアテーナイに行きたい願望
3. 大きくなって岩が動かしたらアテーナイに行けると聞いて、何度となく試みる努力
4. 息子がもうすでに世間に出たがっていることを知った母 Aethra の悲しみ
5. 息子が一人前の人間に成長した Aethra の喜び

たとえば、Theseus が岩を動かそうとして力をこめている傍で、「Aethra は彼を見つめて立っていた。そして手を握りしめた。それは一つには母の誇りの故でもあったが、また母の悲しみの故でもあった」³⁹ とホーソンは書いている。

その後、親子が対面した Theseus と Aegeus の感激、Minotaur のもとへ Theseus を送りこんだクレータ島の王 Minos の娘 Ariadne の心配、息子の帰りを待ちわびる Aegeus 王の父としての気持、などが、物語が展開する縦糸に対する横糸として、親子の愛、人間的情愛のシーンを次々と織り出していくのである。

他の物語でも同様のシーンは沢山あるし、何等かの愛がテーマとなっている物語もある。“The Pygmies”は巨人 Antaeus と Pygmies の兄弟愛の物語であるし、雄牛に連れ去られた娘を母 Telephassa が探す“The Dragon’s Teeth”や、Mother Ceres が Pluto にさらわれた娘 Proserpina を探す“The Pomegranate-Seeds”は、有名な神の行為よりも、さらわれた娘の捜索に見せる母の愛が強調されて描かれている。Theseus に対する Ariadne の助力、Telephassa の子供達の協力、Jason を助ける Media の援助など (“The Golden Fleece”), 協力、助力がつくり出す愛もある。

これらはすべてホーソンが潤色したことであるが、ホーソンは次の二箇所では Anthon 説に異を唱え、大きな書きかえを行っている。

その一つは、“The Minotaur”の Theseus を助けた Ariadne に関する事で、Anthon は Theseus が Ariadne をクレータ島から連れ出したが、Dia あるいは Naxos の島で彼女を置き去りにしたと書いているが、⁴⁰ ホーソンは本文中で、「気高い Theseus がこの偽りを聞いたならば、Minotaur を扱ったのと同じように、このようにそしる人々を扱ったことだろう」⁴¹ と書いて反論する。ホーソンの物語では、Ariadne は Theseus にすすめられても、父のいる島から出なかったことにされ、次のように Theseus に語っている。

「私はあなた [Theseus] と一緒には行けません。私の父 [Minos 王] は年寄りで、彼を愛する人は私以外にはいません。あなたがお考えになるように、父の心はかたくなかもしれませんが、私を失えば破れてしまうことでしょう。ミーノス王はじめは怒ることでしょう。でも間もなく一人娘を許してくれるでしょう。やがてそのうちにもう [いけにえの] 人々が来ないのだということを、きっと喜ぶようになることと思います。テーセウス様、私があなたをお助けしたのは、あなたのためであると同時に、私の父のためでもあったのです。」⁴²

また、Antaeus を殺された Pygmies は、兄の仇といって Hercules に攻めかかった。Anthon によると、Hercules は「彼の小さな敵が示した勇気が大そう気に入って、彼等全部をライオンの毛皮に集めこんで、エウリュステウス王の許に持っていった」⁴³ とあるが、ホーソンはこれを書きかえ、Hercules は小人の Pygmies の勇気に感心して、自分の敗北を認め、彼等を全員その国に残して立ち去ったことにしている。

このような愛情、友情を強調する潤色や書きかえの一方で、ホーソンは一見邪悪と思える行為をする王や魔女に対して、暗い姿のままつき放してしまうのではない。上に見た通り、Ariadne の愛によって Minos 王は救われることになる訳だし、Ulysses の仲間を豚にかえた魔女 Circe は、彼等の大食ぶりを見て、彼等が自分と同じ姿をしているのが恥ずかしくな

って、彼等を豚に変たのであった。また、Proserpina を誘拐した Pluto は、これを「よくなかった行為」⁴⁴ だと認め、自分の地下の宮殿が暗く、自分が朗らかな性質でなかったので、Proserpina の明るい快活さがどうしても欲しかったからだ、と告白している。さらに“*The Minotaur*”で Theseus を毒殺しようとした魔女 Media は、最後の物語“*The Golden Fleece*”では、Jason を助ける協力者として再登場してくる。

さらに戦いや争いを描いても、ホーソンは主人公に怪物を倒させはするが、人間を殺すことはさせない。Anthon の資料によると、Theseus は Aegeus 王の甥達に殺されようとして、逆に彼等を殺したことになっているが、⁴⁵ ホーソンは彼等が逃げたことにしている。もちろんホーソンが無益な殺し合いを肯定する筈はないが、戦争への痛烈な批判も忘れてはいない。竜の歯をまいて生えてきた戦士たちは (“*The Dragon’s Teeth*,” “*The Golden Fleece*”), 戦い殺し合うことだけを一生の目的としてこの世に生まれてきた怪物であったが、ホーソンは、人間も竜の歯の戦士たちと同じく、理由なき殺し合いの戦争を重ねてきたのではなかったかと、痛烈に批判する。そして、“*The Dragon’s Teeth*”では、生き残った竜の歯の戦士五人に、戦うことを止めさせて、Cadmus の協力者にし、最後には彼の子供の遊び相手にしてしまうのである。

ホーソンはこの作品で、竜の歯の戦士以外の「人間は、本来互いに愛し合い、助け合うように生まれてきているのだ」⁴⁶ と述べている。このことこそ *TT* の潤色、書きかえが強調していることであり、ホーソンが自分のより生の声で物語を語りたかったのも、このことのためであった。

要するに、ホーソンは彼の児童文学の最後作となった *TT* において、冒険や不思議な事を描くだけでなく、人間化した神話的人物や神の愛し合い助け合う姿を強調し、暖い情愛中心に物語を展開して、子供の鋭敏な感受性に訴えようとしたのであった。このことは、ホーソンの児童文学のし

めくくりになったばかりでなく、まだ書き上げて一年にも充たない先の小説 *BR* において、大人達のアルカディアであるべきだったブライズデール農場が、自己中心主義と裏切と自殺とによってディストピアと化してしまった暗さを払拭して、ホーソンのアメリカ時代の最後を、子供に対する明るい期待でしめくくることにもなったのである。

注

この小論は、東洋文化社から出版した *Tanglewood Tales* の全訳（1981年、上下二巻）に付した「あとがき」と一部重複するところがある。

- 1 Mary Peabody, quoted in "Historical Introduction" by R. H. Pearce, *True Stories from History and Biography*, "The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne," (以下Cと略す) (Columbus, Ohio: Ohio State University Press, c 1972), VI, 290.
- 2 Hawthorne's letter to H. W. Longfellow, March 21, 1838, quoted *ibid.*, p. 297.
- 3 *Ibid.*, p. 298.
- 4 扉には1852年となっているが、実際には1851年11月8日に出版された (Cf. *ibid.*, p. 305.)
- 5 *Hawthorne's Lost Notebook, 1835-1841* (University Park: The Pennsylvania State University Press, 1978), [p. 82].
- 6 Quoted in "Historical Introduction," C, VI, 299. 少年少女向きの神話物語の計画がどのように展開したかについては、R. H. Pearce のこの序文に詳しい。Pearce は計画の展開を三段階に分けて考えている。
- 7 *WB*, C, VII, 3.
- 8 *Ibid.*, pp. 3-4.
- 9 *Ibid.*, p. 112.
- 10 C, VI, 214.
- 11 "The Wayside," C, VII, 179.
- 12 *WB*, *ibid.*, p. 113.
- 13 *TT*, *ibid.*, pp. 178-9.
- 14 *Ibid.*, p. 179.
- 15 *WB*, *ibid.*, p. 4.

- 16 *TT*, *ibid.*, p. 179.
- 17 *WB*, *ibid.*, p. 3.
- 18 *TT*, *ibid.*, p. 178.
- 19 *WB*, *ibid.*, p. 9.
- 20 Hugo McPherson, *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination* (Toronto: University of Toronto Press, c 1969), p. 14.
- 21 *GC* の三部作では、外枠と歴史上の人物や出来事についての物語は、作品全体の I—XI の区切(章)に截然とはめこまれているのではない。外枠だけで一つの区切が与えられ、おじいさんが歴史上の人物の説明だけをするところもある。*BSC* になると、枠と伝記物語は I—IX の区切(章)にきちんと収められているが、物語の長いものは (Samuel Johnson と Benjamin Franklin) は二つに分けられている。*WB* では、神話物語の長さはほぼ同じで、その前後に必ず枠がついて区切られている。
- 22 “Historical Introduction,” C, VI, 310.
- 23 ホーソンはパークシャー地方の Lenox に1851年11月21日まで住んだが、*WB* は同年7月中頃に脱稿していて、その後を書いた notebook の記録、特に7月28日から8月16日までの “Twenty Days with Julian & Little Bunny by Papa” (*American Notebooks*, C, VIII, 436–86), は使われていない。
- 24 Julian Hawthorne, *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography* (Boston: James R. Osgood & Co., 1885), I, 471.
- 25 “Historical Introduction,” C, VI, 309.
- 26 Centenary Edition の全集のそれぞれの巻の “Historical Introduction” と Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New York: Oxford University Press, 1980) に依る。
- 27 *HSG*, C, II, 5 & 6.
- 28 *Life of Franklin Pierce, The Complete Writings of Nathaniel Hawthorne*, “Large-Paper Edition” (Boston: Houghton, Mifflin & Co., 1900), XVII, 108–111, 116–118, and 129–136.
- 29 *Ibid.*, p. 76.
- 30 C, VII, 187.
- 31 *Yesterdays with Authors* (Boston: Houghton, Mifflin & Co., c1899), p.61.
- 32 *WB* と同じく *TT* でも、ホーソンは固有名になじみのある英語を使い(例 Athens, Quicksilver=G. Hermes, L. Mercury), ローマ神話名を使うことも多い (Ceres = G. Demeter, Ulysses=G. Odysseus). また、ギリシャ神話の Pan はローマ神話の

Faun に相当すると考えられているが、“The Pomegranate-Seeds” では別者として登場させている。

33 *TT*, VII, 183.

34 *Ibid.*, p. 197.

35 *Ibid.*, p. 334.

36 *Life*, p. 158.

37 Turner, *N. H.*: *A Biography*, pp. 422-3.

38 Quoted in McPherson, p. 78.

39 *TT*, VII, 186.

40 Cf. McPherson, p. 80.

41 *TT*, VII, 210.

42 *Ibid.*, p. 210.

43 Quoted in McPherson, p. 85.

44 *TT*, VII, 326.

45 Cf. McPherson, p. 79.

46 *TT*, VII, 260.